

第5表 標高別の越冬率 (1962—1963年)

| 草種 項目 区分 標高 | パ ヒ ア グ ラ ス | | | | | | ダ リ ス グ ラ ス | | | | | |
|----------------------|-------------|-----|-----|---------|-----|-----|-------------|-----|-----|---------|-----|-----|
| | 刈 取 区 | | | 無 刈 取 区 | | | 刈 取 区 | | | 無 刈 取 区 | | |
| | 枯死株 | 残存株 | 残存率 | 枯死株 | 残存株 | 残存率 | 枯死株 | 残存株 | 残存率 | 枯死株 | 残存株 | 残存率 |
| 85m | 2 | 68 | 97 | 14 | 56 | 80 | 40 | 30 | 43 | 67 | 3 | 4 |
| 250m | 3 | 67 | 96 | 3 | 67 | 76 | 11 | 51 | 73 | 14 | 56 | 80 |
| 540m | 30 | 40 | 57 | 47 | 23 | 33 | 43 | 27 | 39 | 62 | 8 | 11 |
| 750m | 49 | 21 | 30 | 36 | 34 | 49 | 56 | 14 | 20 | 62 | 8 | 11 |
| 1,120m | 70 | 0 | 0 | 70 | 0 | 0 | 70 | 0 | 0 | 70 | 0 | 0 |

物生産量、株の維持状態（越冬率、越冬率）などから、現時点において経営に取入れて、経済的にじゅうぶんな利用に耐え得る基幹的草種は、次の草種と推定される。

低標高地帯……暖地型牧草（パヒアグラス、ダリスグラス）

中標高地帯……トールフェスク

高標高地帯……オーチャードグラス、トールフェスク

む す び

標高差と牧草の適種について、既往試験を中心に述べ

てきたが、今後になお多くの問題が残されていることが痛感される。

現在までの適種の選定は、維持年限と収量に中心がおかれており、利用目的による配慮が少ないものと思われる。したがって、それぞれの標高に応じて、採草、放牧を考慮した適種・適品種の検討が必要であろう。

とくに西南暖地の低標高地帯においては、現在までにあつかわれた草種が少なく、また農家での牧草栽培面積が伸びていない。多くの草種を導入し利用目的に応じた草種・品種の選定は今後の課題であろう。

ペレニアルライグラスの新品種紹介

○ キヨサト

正式名 ペレニアルライグラス農林合一号、旧系統名八ヶ岳D-1号。

山梨県農試八ヶ岳分場が収集した外国産種と国内自生種合計70品種を用いて耐病性のある系統より多交配を行ない、10母栄養系を決め再度多交配により育成した二倍体品種。

草型が直立型で、葉幅はせまく、茎も細く草丈も低いが収量は高い。出穂期は5月中旬で早生に属する。耐寒性は強で、特に冬季の低温の厳しい積雪の少ない地方では高い越冬性を示し、翌春の発芽と草勢が良い。しかし耐雪性は弱い。収量は春に集中するが、夏以降の落ち込みも少ない。

関東、中部以南の高冷地、準高冷地で雪の少ないところに適する。採草向きだが、早目に利用すれば放牧用としても使える。

○ ヤツガネ

正式名 ペレニアルライグラス農林合二号、旧系統名八ヶ岳T-2号。山梨県農試八ヶ岳分場育成。

前記同様70品種より7栄養系を選び、再度多交配して育成した四倍体品種。

葉幅広く、茎は太いが茎数はやや少ない。葉色は濃緑色で草丈が高い。草型は中間型で出穂は山梨で6月中旬「マンモスペレニアル」よりさらにおそく晩生型。秋の草伸びが良く、短日低温条件下での生育が極めて良い。

耐寒性は弱い方だが再生力は旺盛で耐雪性は強い。一方耐暑性もあり、耐病性ではカンザビ病に極めて強く、安定した収量を維持する。

放牧地、採草地に向くが、放牧の場合は秋の草伸びが良いため、放牧期間の延長に役立つ。

適地としては、北海道、東北、関東、中部以南の高冷地、準高冷地があげられる。

新品種の種子の供給は実際には3~4年先となります。